松宮弥平の『日本語会話』と日本語教授法観

吉　岡　英　幸

キーワード
松宮弥平　『日本語会話』　教授法　長沼直兄　『標準日本語読本』

0.　はじめに

松宮弥平及び日語文化学校については、資料が少ないこともあって不明のことが多かったが、近年弥平の前橋時代以前の経歴については山下秀雄の発表した資料によりかなり明らかになったが、日語文化協会の組織や活動については、まだ調査すべき事柄も多い。特に直接法を主張した弥平の主著『日本語会話』に英語の対訳や注がついていることは大きな謎であり、その矛盾が指摘されてきた。本稿は、日語文化学校に関する諸資料及び、弥平の教材を発掘調査し、わかった事実をまとめると同時に、『日本語会話』の成立とその特徴を検討して、弥平の日本語教授法観を明らかにすることを主な目的とする。

1.　松宮弥平と日語文化学校

明治維新間もない1871年に生まれた松宮弥平が、初めて日本語教育に携わったのは1893年であった。以後1946年にその生涯を閉じるまで(1)、日本語教育と日本語教師養成にその半生を捧げた。日本語教育のきっかけは、前橋で伝道活動を行っているとき、米国人宣教師ノイスに頼まれて、帰国するまでの５年間行ったものである。弥平は鍋屋旅館を経営していた松宮家に婿養子となり、志していた同志社での神学の勉強をとりやめて、前橋まで日本語を習いに来る宣教師に対し、在留宣教師の事業に従事しながら日本語教育を行った。周囲に指導や助言を受ける機会もなく、自らの考えで実践を行い経験を深めていくという日本語の個人教授としてのスタートであった。

1912年春[2]、宣教師団体からの要請を受け上京。弥平は自宅でほかの２名の教師と教材を作りながら朝8時から夕方まで個人教授を行った。そして、翌1913年10月７日元大蔵大臣で当時の東京市長である阪谷芳郎が設立代表者・名誉校長となり、村上直次郎東京外国語学校長を理事長に、大日本平和協会の付属事業として日語学校が東京外国語学校内に創設されると[3]同時に、教授主任として迎えられた。修業年限３年の本科（定員60人）と１年の速成科（定員20人）が設けられ、初代校長はアメリカ人フランク・ミュラーで、生徒は70人、ほとんどが在留宣教師で米国人が多かった。弥平は教授法に関しては直接法であるべきだという強い信念を持っており、校長のミュラーもそれを支持した。教師志望で来た帝国大学や東京文理科大学の卒業生に教材を渡し教え方について説明をした後授業をさせて、隣の部屋でミュラーが聞いていて英語などで説明するとたちまち首にした[4]。弥平にとって最も大きな問題は教師をどう確保するかということであった。それまでの個人教授時代と異なり、自分の考えを理解し教授技術を身につけた教師をそろえ一定の教育の質を保つという日語学校の教育全般の責任を負う立場になったわけである。そのため、1914年に第１回の日本語教授法講習会を開催、以降毎年のように講習会を開き、教師養成を行うと同時に、適任者を選んで教師として採用した。

しかし、弥平は突然日語学校を辞め、1921年に神田の三崎会館を借りて教師養成と日本語教育を目的とした松宮日本語学校を設立、後目白の福音英語学校を借りて自分の教育理念の実践を行った。この学校は私塾の温かみがあって、弥平を中心とした学校家族であったと息子松宮一也は述懐している[5]。一方、神田猿楽町から1922年に赤坂に移っていた日語学校は、1923年９月の関東大震災で罹災し、翌年３月まで休校とし、９月に三田に移った。1927年に神田に移転し、三崎会館や東京基督教青年会館を借りたりした。そして、1930年９月日語文化学校と改称し[6]、日本語だけでなく日本文化に関する教育も積極的に行うようになった。この時需要のなくなった速成科を廃し、地方の学習者のために特別科を設け、通信教育を行うことになった。しかし、経営的に行き詰まっており、ダウンズ校長のもと建て直し案が検討され、松宮日本語学校との合併計画が浮上する。そして、結局弥平が国語部長として教育面を、一也が経営面の一切を任されることになって復帰、松宮親子が日語文化学校の組織の中心と

なる。一也は５か年計画を立て、ａ．自前の校舎の建設、ｂ．学校の財団法人化、ｃ．日系二世の教育、ｄ．日本語の海外進出事業の推進などを目標に掲げる。そして、ａは1936年芝に新校舎落成、ｂは1939年２月に財団法人日語文化協会が認可され、阪谷芳郎が理事長に就任する[7]。ｃは1933年９月に日系二世部を設け、当時日本留学がブームになっていたアメリカを中心とする日系二世の日本語教育を始めた[8]。ｄは外務省との関係を密にしていき、1935年からの文化事業部の出版助成、1938年バンコクにある日泰協会を通しての日本語学校創設の際の日本語教師派遣の委嘱、その外日本語教授法講習会に対する援助、教材編纂やその海外への寄贈に対する援助など、強い支援を受けながら推進していった。また、一也は中国での日本語普及事業の足がかりのため興亜院との関係も深めていく。1939年度に対支日本語普及に関する研究事業の委嘱、翌1940年度から協会は興亜院から助成を受けることになり、東亜関係事業委員会を組織、秋に協会内に文部省図書局長を委員長とする日本語教育振興会が設置された。1942年の時点で、生徒は欧米ほか13か国約80名、日本語教師15名、横浜、京城に分校を持ち、地方在住の外国人のため通信教育での日本語教育も行っていた[9]。協会は日本語学校のほかに弥平が所長を務める日本語教授研究所を設け、教師養成、教授法の研究・教材の編纂などを行っていた。こうした組織の発展は、運営を任された一也の経営手腕と、庇護者である理事長阪谷芳郎の大きな影響力によるものである。しかし、1941年11月、日語文化学校生みの親であり30年近く常に親身になって組織を支え続けてきた阪谷芳郎が亡くなる。当面弥平を理事長代行に立て事に当たることにするが、日本語教育をめぐる政策の転換は、協会の思惑とは反対の方向に動いていく。外務省や興亜院が関わっていた日本語教育事業は、文部省主導の下に一元化の方向に進み始め、1941年８月文部大臣を会長とする新たな日本語教育振興会が文部省内に事務所を移し発足した。この頃から弥平親子及び日語文化学校は表舞台から外れていくことになり、文部省主導の日本語教育は西尾実及び長沼直兄にシフトして動いていくことになる[10]。

長沼直兄は1894年群馬県に生まれる。弥平とは23歳違いである。彼が初めて日本語教育を始めたのは1936年の日語学校であり、ちょうど弥平が日語学校を去った後であった。1922年日語学校の校長の用を頼まれ会ったのがハロルド・

パーマーであり、その後パーマーの紹介で米国大使館の日本語教師となり、1931年から1934年までに『標準日本語読本』巻1～巻6を刊行する[11]。1939年文部省の臨時日本語教科書編纂図書局事務嘱託となる。1941年日本語振興会理事、『ハナシコトバ学習指導書』の上・中を執筆、1943年『成人用速成日本語教本上』1944年『成人用速成日本語教本学習指導書上巻』の刊行などがある。直兄と弥平の接触は1937年頃、直兄が日語文化学校で弥平の日本語クラスを参観した時である[12]。

なお、松宮弥平は、廓清会本部の調査部に属し、1925年に廓清会・日本基督教婦人矯風会連合発行の『群馬県花柳病及接客業婦調』の凡例を書いている。また、1932年に松宮一也、橋本成之共著、廓清会婦人矯風会廃娼連盟発行の『農村疲弊と子女売買問題』では弥平が「著作者」となっており、序も担当している。日本語教育に専念しながら、廃娼運動を推進するなど社会的な活動も行っていた。

2．日語文化学校の日本語教材

日語文化学校で作成、使用された教材には以下のようなものがある。

a．『第一学年第一教材』～『第一学年第三教材』

b．『補助読本』一、二

c．『日本語会話教本初編』

d．『日本語読本』巻一、巻二

e．『日本語会話』巻一～巻三

f．『口語法』

g．『日本語会話語法』第一巻～第三巻

h．『A GRAMMAR OF SPOKEN JAPANESE』

aは手書きの謄写印刷で『第一学年第一教材』は表紙の中央に書名、右下に「日語学校」とあり、全体は37課の構成である。『第一学年第二教材』は未見であるが、『第一学年第三教材』も謄写印刷で、表紙の書名と「日語文化学校」以外『第一学年第一教材』と同様すべて手書きであり、内容は例文集である。作成時期はどこにも記されていないが、手書きであること、「日語学校」と記してあること、1942年刊行の『日本語教授指針―入門期―』で、日語文化

学校では「～があります」の文型から入るのが最も適切であると考えているとしており[13]、ｄゃｅでは「～があります」が最初の学習項目となっているのに対し、『第一学年第一教材』の１課の学習項目は「これ／それ は～です」となっていることなどから、『日本語会話教本』や『日本語会話』以前の日語学校時代に作成・使用されていたもので、それらの原形をなす教材であると考えられる。

ｂは新聞などから選んだ何編かの読み物教材で、表紙に「補助読本 日語文化学校」とあり奥付けはない。それぞれの本文の後ろに出典と「大正15年」から「昭和７年」までの間の印刷年月日と「松宮日本語学校」と記されていることを考えると、松宮日本語学校時代、もしくはそれ以前の日語学校時代から使用していたものもあると思われ、新聞などから読み物として適当な資料を集め、その都度印刷教材化して使用していったものを後に1冊に編纂した教材であろう。

ｃは未見であるが、松宮弥平著『日本語教授法』に本書の書名やその中の例文が取り上げられており、その例文はｅの巻一の本文と似ている。「松宮弥平述」とある謄写印刷の教師用の６ページの『日本語会話教本による会話の稽古の仕方』に、「此の日本語会話教本（日本語通信教授会話の部）には……」とあるのを見ると、通信教育用の教材としても使用されていたようである。1936年刊の『日本語教授法』に本書の書名や内容が出てくるのでそれ以前の刊行である。

ｄは表紙に「松宮弥平著　日本語読本 日語文化学校刊行」とあり、本文の最後のページに「非売品」とある。奥付けがなく発行年は不明であるが、『日本語教授法』に本書の書名や内容が出てくるので1936年以前の刊行。本書には教師用の資料として1938年に作成された謄写印刷の『日本語読本の助詞用例』（「昭和13年８月30日訂正印刷 日語文化学校」とある）と、同じく６ページの謄写印刷の『日本語読本の扱い方』(作成年不明)がある。後者によると、本書はｃによって会話を教え始めてから約1週間以上、20課くらいまで学習した頃に使い始めるとある。ｃで会話を教え、後追いの形で本書を使用し文字の導入、読み書きを指導していくために作成された教材である。

ｅは外務省文化部の後援を得て出版されたもので、巻一の表紙は「EX-

ERCISES IN JAPANESE CONVERSATION BOOK Ⅰ By YAHEI MATSUMIYA Dean of The Language Department, The School of Japanese Language and Culture」とあり、次に日本語で「松宮弥平著 日本語会話 巻一 日語文化学校刊行」とある。各巻の奥付けによると、初版は巻一が1937年7月、巻二が1936年3月、巻三が1938年9月の刊行となっている。はじめに各巻ともダウンズ校長の、次いで弥平のそれぞれ英語の序がある。本文のすべての日本語の文例にはローマ字と英訳がついている。3巻という体裁から見ても内容の量から見ても、日語文化学校及び弥平著作となっている教材の中で最も教材らしい教材と言える。

fは謄写印刷で、表紙の書名と「日語文化学校」以外すべて手書きである。内容は品詞ごとに用例をあげて解説したもので、単語などに英語訳を併記しているのが目をひく。作成年は不明である。

gは3巻とも謄写印刷で、表紙に書名と「松宮弥平著　日語文化学校」とある。第一巻は文、言葉、品詞、名詞、代名詞、数詞の6章に分けて解説したもので、裏表紙に「昭和十二年十月印刷」とある。第二巻は動詞、形容詞の2章に分け解説したもので、裏表紙に「昭和十三年十月一日訂正印刷」とある。第三巻は助動詞、副詞、接続詞、感詞、言葉の構成、文の構成の6章に分けて解説したもので、印刷年月日は記されていない。第一巻の初めの「日本語会話語法の取扱」によると、本書は週に1回くらい各項目ごとに読ませて文例を作らせるなどして、日本語の文法体系を理解させるための教材で、3年目の学習者を対象としている。第三巻の表紙に「本通信科教材はすべて本校の通信教授を受くる本人の外には使用を許しません 日語文化学校」という印が押してあり、通信教育用にも使用されていたことがわかる。

hは表紙に書名と「BY YAHEI MATSUMIYA, Dean of the Language Department The School of Japanese Language and Culture」とあり、奥付けによると初版は1935年7月発行。内容は文、言葉、品詞、名詞、代名詞、数詞、形容詞、動詞、助動詞、助詞、副詞、接続詞、感詞、接頭語と接尾語の各章ごとに英語で解説したものである。

また、1939年6月1日に日語文化協会から文部省図書局長宛に回答した「満支留学生ニ対スル日本語教授資料」[14]によると、使用教材として上記以外の弥

平及び学校編纂の著作には、

i.『日本語会話入門及初編』(松宮弥平著)

j.『日本昔噺会話』(松宮弥平著)

k.『日本地理』(本校編纂)

l.『随筆集』(本校編纂) (松宮弥平著)

m.『基督伝』巻一～巻四 (松宮弥平編)

n.『教会用語』巻一～巻四 (松宮弥平編)

o.『基督喩話』巻一、巻二 (松宮弥平編)

p.『聖書(口語訳)』(松宮弥平訳)

q.『話方教本』巻一、巻二 (松宮弥平編)

r.『教会儀式用語』(松宮弥平編)

があげてある。iは『日本語会話』に入る前の会話教材で、基本的な発音や仮名を指導するための教材ではないかと推測される。m～rは、日語文化学校の学習者の大半を占めた宣教師のための教材であるが、これ以外に、A5サイズ、51ページの謄写印刷の『説教集』もあるという[15]。

日本語教材ではないが、日語文化学校の教材の具体的な教授法などを紹介したものとして、松宮弥平著『日本語教授法』(1936年6月、日語文化学校発行)、日本語教授研究所『日本語教授指針－入門期－』(1942年7月、日語文化協会発行)、松宮弥平著『日本語教授の出発点』(1942年10月、日語文化学校発行)がある。

3.『日本語会話』巻一の文法学習項目

『日本語会話』の成立に関しては後に述べるように、英語の対訳や注を付けて刊行することは弥平の本意ではなかったというが、本書は3巻の体裁を持つ弥平44年にわたる日本語教育の成果であり、彼の日本語教育観、特に具体的な学習項目の考えを見るに適した教材ということができよう。特に初級に当たる巻一の各課の学習項目は明確であり、基本的な文型と語彙を各課に配した積み重ね方式をとっている。それに対し、巻二及び巻三の各課の学習項目は巻一のように明確ではなく、巻一に続く初中級もしくは中級レベルの文型や語彙などについての理念や編纂意図が伝わってこない。弥平の『日本語教授法』などを

見ても多くが入門期の具体的な教授法について詳述しているように、弥平の日本語教育の特徴は入門期にあると考えられる。したがって、彼の日本語教育観の特徴を探るためには、巻一の具体的な文法の学習項目を調べるのが最も適当であると考えられる。

巻一の全体は、「入門」と「本編」との2部構成となっている。「入門」は五十音図及び数字、「ハタ」「ハナ」などの単語の片仮名表記とそのローマ字及びそれぞれの意味を理解させるための挿し絵、「イモ」「ネギ」「チャワン ノ フタ」「シロイ イヌ」などの語句の片仮名表記とそのローマ字及びその対訳、そして、対訳のつけにくい「障子」などの英語の説明などがある。「本編」は1課から65課の構成で、各課は頭に「一」「二」というように漢数字を付した1文ごとの日本語の例文を記した本文と、下段にそのローマ字表記と英訳、及び語句や文法の英語での説明で構成されている。巻一の各課の文法学習項目の特色を検討するため、現代の初級の文法学習項目を基準にし、それがどのくらい重なりがあるかを調べてみる。参考にほぼ同じ頃の1931年にアメリカ大使館で使用するために作成された、長沼直兄著『標準日本語読本』巻一も調査の対象とする。具体的には『日本語能力試験出題基準』の3級、4級の文法シラバス項目[16]がこの2種類の教材にどのぐらい採られているかをみる。『標準日本語読本』巻一は、一部が仮名表記の学習のための「練習」で、二部が1課から40課の構成の本編で、三部から中級に近いレベルになるため、二部を対象とする。数字は松宮の場合は巻一の本編の、長沼の場合は巻一の二部のそれぞれの提出課を示すが、複数の文法項目がある場合、そのうち一つでもあればその初出の課を示す。

1）4級の文型

A．文法事項

A－I 文型、活用等

文法項目	松宮	長沼	文法項目	松宮	長沼
「は」＋疑問詞	21	1	疑問詞＋「が」	12	10
形容詞の現在・過去・否定	57	5	形容詞のテ形 Aくて		7

形容詞の連用形＋動詞		20	形容詞＋名詞 A+N	5	1
形容詞＋の Aの	39	1	形容動詞 現在・過去・否定		31
形容動詞のテ形 ANで		23	形容動詞の連用形＋動詞		
形容動詞＋名詞 ANな＋N	25		形容動詞＋の ANなの		
存在文 NにNがある／いる	7	5	存在文 NにNがQある／いる	18	6
所在文 NはNにある／いる	28	5	動詞 現在・過去・否定形	34	21
動詞の自他 NがV／NをV		19	動詞のテ形 Vて	26	4
動詞のテアル形 Vてある	13	19	動詞のテイル形 Vている	15	4
動詞のナイデ形 Vないで			名詞述語文の現在・過去・否定		21
名詞述語文のテ形 Nで		6	名詞＋の＋名詞 NのN	3	2
名詞＋のだ 私のだ	36	5	連体修飾＋名詞 買った本	30	30

A－Ⅱ　助詞、指示詞、疑問詞等

疑問詞 何	12	1	疑問詞 だれ／どなた	22	9
疑問詞 いつ	46	20	疑問詞 いくつ	18	8
疑問詞 いくら	24		疑問詞 どこ	22	11
疑問詞 どれ	22	10	疑問詞 どう		16
疑問詞 どんな		2	疑問詞 どのぐらい		
疑問詞 なぜ／どうして		15	疑問詞＋か 何か		30
疑問詞＋も＋否定 何も		11	これ、それ、あれ	21	1
この、その、あの	20	2	ここ、そこ、あそこ	10	33
こちら、そちら、あちらが			友達が来た(主語)	13	13
を 私はパンを食べる (目的語)	14	4	を 家を出る(起点等＋を)		15
に ここに本がある(場所)	7	5	に バスに乗る(到達点)		39
に 7時に起きる(時間)	43	17	に 本を買いに行く(目的)	56	20
に 1日に3回行く(回数)			で 公園で野球をする(場所)	51	24
で バスで行く(手段方法)	46	6	で 木で机を作る(材料)		19
で 病気で学校を休む(理由)			で 全部で百円(数量)	39	32
へ 東京へ行く(方向)	26	18	と 本とノート	4	5
と 妹と(いっしょに)		39	と 友達と会う(動作の相手)		23

から、まで 家から駅まで(場所)	42	22	から、まで 1時から3時まで(時間)	42	17
や 切手やはがき	51	19	は 私は学生です	15	1
は テニスは外でする (目的語)		17	は 酒は飲まない(否定と)	45	13
は 私は行くが、兄は～ (対比)		8	も 私は行く。兄も行く	15	13
も 本もノートもある		40	格助詞＋は／も には、へも	23	6
か 本かノート			か 行くか行かないか		
など 本やノートなど	51		ぐらい 30人ぐらい		22
だけ 果物だけ食べた		36	しか 果物しか食べない		7
て 朝起きて散歩した(単純接続)	64	17	て 本を見て歌う(副詞的、方法)		14
て 風邪をひいて休む(理由)		31	が すいませんが本を		
か これはあなたの本ですか	8	1	か 先生ですか、学生ですか		2
ね 今日はいい天気ですね		37	よ その本はいいですよ		37
わ 私もいくわ			中 1年中暑い		
たち／ども／方 私たち		14	あまり～ない あまり見ない		28
1～10000／一つ (数)	19	8	枚／冊／本等 (助数詞)	32	8
～月／～日／～曜日	43	18	～時～分 (時刻)	33	17
～時間／～分間 (時間)		17			

B．表現意図等

依頼 Nを下さい	14	8	依頼 ～て下さい	16	4
依頼 ～ないで下さい		25	依頼 Nを／Vて下さいませんか		8
勧誘 Vましょう			勧誘 Vませんか		31
希望 Nがほしい			希望 Vたい		17
逆説 ～が		8	同時 V時		17
同時 Vながら		40	前後 Vてから		20
前後 Vた後(で)			前後 V前(に)		
推量でしょう／だろう		20	並立 VたりVたり		
変化 Aく／ANに／になる	52	10	変化Aく／AN／Nにする		
変化もう＋肯定／否定	57	18	変化まだ＋肯定／否定	45	18
名称の導入～というN		12	理由 ～から		15

2） 3級の文型

A．文法事項

A—Ⅰ　文型、活用

文法項目	松宮	長沼	文法項目	松宮	長沼
受身 V(ら)れる		32	敬語 おVになる	50	35
敬語 V(ら)れる			敬語 おN	14	35
敬語 おVする			敬語 おVいたす		35
敬語 (お)Aございます	57		敬語 AN／Nでございます	24	35
使役 V(さ)せる		34	使役＋受身 V(さ)せられる		
～ずに Vず(に)		35	文の名詞化 ～の		14
文の名詞化 ～こと		26	文の名詞化 ～ということ		
補助動詞 Vて いく／くる	26	29	補助動詞 Vてみる		33
補助動詞 Vてしまう			補助動詞 Vておく		34

A－Ⅱ　助詞・指示語等

こんな、そんな、あんな			こう、そう、ああ		35
縮約形 ～ちゃ			までに9時までに		
も 50万円も持っている			ばかり テレビばかり見て		28
でも お茶でも飲もう(例示)		35	疑問詞＋でも 何でも		27
とか 本とかノートとか			し 頭もいいし体も丈夫		
の いっしょに行くの			だい どうしたんだい		
かい いっしょに行くかい			Aさ／ANさ 暑さ		
らしい 男らしい人			Aがる／ANがる 暑がる		

B．表現意図等

意志 V(よ)うと思う			意志 ～つもりだ		31
意志 V(よ)うとする			意志 Vことにする		
意志 Nにする		33	依頼 おVください	65	37
依頼 (さ)せてください		34	引用 ～と言う	63	12

依頼 (さ)せてください		34	引用 ～と言う	63	12
開始 Vはじめる		29	開始 Vだす		
過度 Vすぎる			可能 Vことができる		14
可能 V(ら)れる		28	勧告 ～ほうがいい		34
希望 Vたがる			義務 ～なければならない		24
逆説 ～のに			許可 ～て(も)いい		13
禁止 ～てはいけない		13	禁止 ～な		
経験 Vたことがある		31	継続 V続ける		
終了 V終わる			受給 あげる／もらう／くれる		24
受給 ～てあげる／もらう／くれる		33	受給 さしあげる／いただく／下さる		
受給 ～てさしあげる／いただく／下さる			条件 ～ば		16
条件 ～たら		34	条件 ～なら		25
条件 ～と	59	10	状態放置 ～まま		
譲歩 ～ても／でも		16	疑問詞＋ても／でも		
推量 ～と思う		32	推量 ～らしい		
推量 ～かもしれない		29	推量 ～はずだ／はずがない		31
推量 ～ようだ		34	伝聞 ～そうだ		26
難易 Vやすい			難易 Vにくい		
比較 ～は～より		10	比較 ～と～とどちら／ほう		10
比較 ～ほど～ない		14	比喩 ～よう		
不必要 ～なくてもいい			方法 ～かた		
命令 V命令形			命令 Vなさい		7
目的 Vため(に)			様態 ～そう		
理由 ～ので		39	理由 ～ため(に)		
～は～が 私は犬が好きだ		32	～は～が 象は鼻が長い		25
～がする 音／におい がする			V ことがある 休むこと～		
Vことになる 話すことになる			～のだ どこへ行ったのか		
疑問詞＋～か だれが来たか		35	～かどうか 来たかどうか		
～ように言う		34	～ようにする		
～ようになる			Vところだ 行くところだ		

上記の文法学習項目をまとめると次の表のようになる。

	4 級	3 級	計	A－Ⅰ	A－Ⅱ	小計	B
項目数	115	100	215	44	83	127	88
松宮	55(49%)	8(8%)	63(29%)	21(48%)	34(41%)	55(43%)	8(9%)
長沼	94(82%)	50(50%)	144(67%)	34(77%)	60(72%)	94(74%)	50(57%)

松宮弥平も長沼直兄も、３級の項目より４級の項目のほうの重なりが大きいことは、現代と同じく、より基本の文法シラバスに対する認識はあったと考えられる。長沼の４級の項目は８割以上採られているのに対し、弥平の場合半分以下で、３級の項目は１割にも達していない。また、A－Ⅰの文型・活用、A－Ⅱの助詞・指示語等が約４割、Bの表現意図は１割も採られていない。明治期の日本語教科書に上記のすべての項目で７割以上の重なりが見られる教材が作成されていることを考えると[17]、必ずしも時代的な隔たりによる文法項目の考え方の違いではなく、教材作成者の編纂方針の違いと考えるべきである。弥平は初級では文法上極端なくらいシンプルな日本語を教えるべきだと考えていたといえる。

このことは語彙の面でも言えることで、『日本語会話 巻一』で使用されている語彙は、形容詞が「白い、黒い、赤い、長い、高い、低い、広い、狭い、大きい、小さい、厚い、早い、遠い、近い」の14語、形容動詞は「きれい」が１語あるが、弥平は『口語法』や『日本語会話語法』などでも形容動詞を認めておらず、本書でも「きれいです」の使用例のみで名詞として扱っている。副詞は「少し、たくさん、ちょっと、しばらく、もう、まだ、すぐ、どうぞ」の８語、接続詞は「そして」の１語であり、動詞は約50語、名詞は固有名詞・数詞を除くと200語余りしかない。長沼の『標準日本語読本 巻一』の二部の形容詞37語、形容動詞14語、副詞33語、動詞約160語と比べると、いかに語彙が少ないかがわかる。『日本語会話 巻一』は、形容詞や副詞をできるだけ抑え、構文としてシンプルな、また動詞や名詞なども基本的な語彙だけを学習項目としており、表現意図などの観点はほとんど考えられていない教材と言える。

4．松宮弥平の日本語教授法観

松宮弥平はその著『日本語教授法』で、当時の日本語教育に対する批判として、理解偏重、読みの偏重、翻訳による教育、語法・文法からの導入、暗誦の強制、生徒の子供扱い、という６つの問題点をあげ批判をしている[18]。弥平が日本語教育を始めた1900年前後からほぼ10年間は、中国から大量の留学生が来日し、かつてないほどの日本語教育ブームが起こった時期である。日本語教材も数多く開発されたが、ほとんどが中国語の対訳や注釈をつけた、中国語母語話者・漢字系の学習者のためのものであった。そして、その教え方も文字言語を軸にした理解、読解を中心にしたものが一般的であった。ブームが去った大正期以降の国内の学習者も、中国・台湾などの漢字系学習者が中心であり、この流れはほとんど変わることがなかったというのが当時の状況であった。現在でも、初級クラスで新出語の訳や文法事項の説明を英語などで行い定着のための練習はほとんど行わずに理解させることが主目的であるかのように授業を進めたり、中・上級クラスで教科書を読ませその解釈や漢字指導で授業の大半を費やしたりする新米教師をよく見ることを考えると、日本語教授法の研究も進んでおらず教材教具の少なかった当時の状況は容易に想像がつく。こうした因襲的日本語教育を打破しようとした弥平の日本語教授法の特徴をあげると、

１．徹底した直接法

２．練習の重視

３．音声言語からの導入

４．入門期のシンプルな日本語の習得

である。弥平は、自分は40年来外国人に日本語を教えてきたが、「未だかつて生徒の国語を介して説明したり、翻訳で理解させたりしたことは、唯の一回でも、唯の一語でもありはしない」と言い切るほど厳格な直接法の実践を行っている[19]。また、「国定小学教科書などを扱って、それを読ませて、意義を解すれば、それで日本語を学んだことにした読解式の方法」が行われているが、「読解式教授法は理解速了に堕して、しょっちゅう翻訳が付き纏うので、練習成熟が不十分になる」と言っているように[20]、弥平の徹底した直接法の考えは、当時の読解・理解偏重の教授法に対する批判であり、自らの実践経験からくる自信に裏打ちされた主張でもあった。『日本語教授法』の自序で「言葉を

教えることは意味を教えることだけでなく、言葉そのものを自由に口述し得るようにするのでなくてはならぬ。言葉が自由に操れるようになるのは理解によるのでなく、全く練習の結果である。それには以前から行われていた翻訳教授の要はない。」と記している[21]。また、「復習と応用」の中で、練習について「学習した言葉及び言葉遣いを幾度となく反復し、又反復応用する作業」であり、授業時間の半分ないし6割をこれに当てるべきだと主張する。そして、練習には「復習」と「応用」があり、前者は教師の発話する語句や文を反復させ正しく言えるようになるまで繰り返させる、いわゆる模倣練習であり、毎回の授業では既習項目を反復させて復習する作業が重要であると言う。「応用」は「箱があります」という存在文の場合、「箱」を「紙」、「帳面」「鉛筆」などに入れ替えさせたり、「猫」や「犬」に変えて「います」と述語を変えさせるなど、いわゆる代入練習や転換練習の方法を紹介している。また、語句の場合でも「飛ぶ」であれば、「飛び上がる」「飛び出す」「飛び立つ」など適当な例文を作り関連する熟語なども教えるべきであるとしている[22]。文型練習という言葉もその概念も確立されていなかった当時としては、画期的な指導法である。

そして、日本語教育には読解と会話の二つの分野があるが、根幹は会話であり、入門期は発音の聴取、模倣の繰り返しから始まる発音練習が第一歩で、1語、1文と言う風に会話の練習を丁寧に行っていき、少し遅れて文字指導、読み物教材の学習を進めていく。文法・語法は初めから取り立てて説明的に理解させる必要はなく、日本語について相当の理解ができてから帰納的整理的に行えばよいというのが弥平の具体的な教授法の考え方である。現在では多くの日本語教育機関で行われている一般的な教え方であるが、読解・理解・文法の重視が普通の当時としては斬新な教授法の主張であった。弥平のもう一つの特徴は、前章で見たように入門期の教材の学習項目が少なくシンプルなことである。最少の語彙数、副詞や形容詞などを極力抑え、複文や重文なども最小限にとどめるなど、学習者に負担を少なくし学習しやすい配慮がされていることである。これは裏をかえせば教える側に対する配慮でもあり、その学習項目及び配列は弥平が長年の経験によって直接法で無理なく教え得ると考えた基準でもある。自分のやり方を守れば「自然に日本語教授作業は運ばれて行く」と言い切っている[23]のもそれを示している。しかし、入門期・初級段階で習得する語

彙数や文法項目の少なさは、換言すれば到達度の低さを示しており、ある一定の期間に効率よく学習し一定の達成度を要求する学習者からは不満が出る恐れはあろう。宣教師団体からの懇望で前橋から上京し教授主任として迎えられた日語学校を辞めざるをえなくなった事情も到達度の問題、ひいては新出の語彙や文型の理解に時間がかかり、学習者に信頼される授業を行うには相当高度な教授技術を要求される直接法に対する不満から、宣教師団体側と軋轢が生じたためではないかと推測される[24]。弥平は、生徒の実力に応じて「自然に」「無理なく」教えるべきで「急速を避けるべき」ことを力説しているが[25]、こうしたシンプルな日本語学習の考えは、弥平の日本語教育が個々の学習者に合わせることを基本にする個人教授の経験から培われたものであることに起因している。宣教師団体などから教授法の変更を迫るなどの圧力があったと推測されるが、弥平は自分の信念をまげることを潔しとしないで日語学校を辞め、自由に自分の考えが実践できる松宮日本語学校を設立したのである[26]。

こうした厳格な直接法を守る弥平が、『日本語会話』になぜ英訳や英語の注を付けたのであろうか。この著書が出版されたのは、日語文化学校が大きく発展する時期であり、体裁から見ても立派な印象を与え、対外的に看板となるような教科書が必要であったこと、海外進出を企図し外務省の支援を受けての出版という背景から、直接法で教えられるベテランの日本人教師がいない海外でも使用でき得るものが望ましいなどの理由で、この教科書が生まれたと考えられる。本書は弥平の既成の著書、恐らく『日本語会話教本初編』などをもとにして本文に英訳などを付け、自習も可能な本として出版したものと思われる。『A GRAMMAR OF SPOKEN JAPANESE』も同じ事情から『日本語会話』とセットのような考えから刊行されたものであろう。『日本語会話』全3巻は1939年に、同じく外務省文化事業部の出版助成を得た『A GRAMMAR OF SPOKEN JAPANESE』、『日本語教授法』、初歩日本語学習用蓄音機レコード5枚をセットにし、全世界の日本国大使館・公使館・領事館、著名な大学、図書館に寄贈された[27]。当時日語文化学校で教鞭をとっており、『日本語会話』の校正作業も手伝ったという加藤諄氏[28]によると、学校の運営一切を任されていた一也が企画し、一也夫人も英訳を担当するなどして生まれたもので、英訳や英語の注を付けることは必ずしも弥平の意志ではなかったという。組織の発展

に邁進する息子一也に譲歩してできたのが対訳付きの『日本語会話』であった。弥平はもちろん他の教師も、この本を学校ではおおっぴらには使用することはなく、教師は参考書として、生徒は自習用として利用していたという。長沼直兄が、授業では英語を媒介語に使用し、アメリカ大使館で使用するために作成した『標準日本語読本』とは、前提とされた教授法についての考え方が大きく異なっているのである。

5．日本語教育史における松宮弥平

日本語教育史の上で松宮弥平が評価されるべきことは、以下の点であろう。

1．実践に役立つ具体的な教え方を公刊したこと

2．日本語教師の養成に尽力したこと

弥平は『日本語教授の出発点』で、日本語の普及が各方面から論議されるようになり喜ぶべき状況ではあるが、肝心の日本語教授法の問題に関しては当事者にあまり関心をはらわれていない。 論議があっても現実からかけ離れており「実地に施す指針、方法ということになると、殆ど何の拠り所も与えられないような恨みがあり」、「対外人日本語教授法に関する著作の数々を見ても、依然として、教授の理論や言葉の上の論議に傾倒したものが少なくな」いが、「日本語教授問題は、最早、机の上の理屈で片付けられない問題になって」おり、実践の場で役に立つ具体的な教授法の必要性を説いている[29]。彼は『日本語教授法』や『日本語教授の出発点』などで、入門期の具体的な教え方を丁寧に記しているが、このように教科書の内容に即した具体的な指導案はそれまでにほとんど公刊されたことがなかった。日本語教育を志す人々にとってはまさにバイブルであり、弥平の大きな功績の一つである。

弥平が最初の日本語教授法講習会を開いたのは、1914年1月である。前年に日語学校の創立と同時に教授主任として迎えられ、教育全般を任された弥平が直面した最も大きな問題である教師の確保を解決するための企画であった。この講習会では弥平が日本語教授法を、東京高等商業学校教授のエドワード・ガントレットが恒子夫人の通訳で音声学を担当した。受講者は女性が多く、女学校の英語の教師や地方で宣教師に日本語を教えている日本語教師など30人程度であった[30]。講習会はその後も毎年続けられ、東京だけでなく時には福岡や軽

井沢などでも開かれ、千人以上が受講したという。しかし、短期間の講習会で講義を聞いただけですぐに教壇に立てるわけではない。実践の場を通しての指導を受けなければ教師として満足な経験が得られないことはいうまでもない。そのため、日語文化協会設立後は日本語教授研究所に研究科を設け、後継者育成を行うことに変更、弥平は晩年をここで実習を含めて直接指導に当たり教師養成を行った。戦前、日本語教師養成は他の組織でも行われたが[31]、弥平のように長期間にわたり１人が中心となって自分の教授法を説き続け、千人以上の受講生を世に送り出したという例はほかにない。

加藤諄氏も1937年頃、偶然目にした広告を見て、神田のＹＭＣＡで行われた日語文化学校の日本語教授法講習会を受講し、その後実際の日本語クラスの見学などをして教壇に立ったという。日語文化学校の使用教材『日本地理』（２章のｋの教材）は、弥平から形容詞、副詞の使用を極力抑えるという指示のもとで作成を依頼され氏が作ったものである。日語文化学校で、黙々と『大言海』と取り組み、『日語読本』の絶えざる改訂を心がけていた弥平の姿が今でも目に浮かぶという。

付記　本文中の引用文献の旧字体や旧仮名遣いなどの表記に関しては、原則として現代表記の基準にのっとり書き改めた。

注

(1)　山下秀雄「現代日本語教育の源流をたずねて［続編］（ii）―戦中期へと向かう時代的背景と長沼直兄の日本語教育―」『日本語教育研究』35号、1998年５月、p. 17参照。吉田百合子の「松宮弥平年譜」によると、伊予国宇和島の儒者近沢正道の長男として生まれ、明治30年松宮志んの婿養子となったという。

(2)　松宮弥平『日本語教授法』日語文化学校、1936年６月、自序 p. 3。
松宮一也『日本語の世界的進出』婦女界社、1942年10月、p. 305によると、「明治45年の秋」としているが、ここでは弥平の記述による。

(3)　故阪谷子爵記念事業会『阪谷芳郎伝』1951年２月、p. 598

(4)　松宮一也『日本語の世界的進出』婦女界社、1942年10月、p. 307

(5)　前掲(4) p. 310

(6)　前掲(3) p. 598

(7)　前掲(3) p. 713。松宮一也は前掲(4) p. 354で、「財団法人の設立も昭和13年２月になり」としているが、これは誤り。東京都公文書館の記録も「昭和14年２月15日」となっている。

(8)　前掲(4) pp. 324-329。日系二世の日本留学と日本語教育については、吉岡英幸

「早稲田国際学院の日本語教育」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』11号、1998年6月参照。

(9) 前掲(4) p. 193

(10) 1940年発足の日本語教育振興会には、33人の委員の中に弥平も加わっているが、一也とともに長沼直兄も常任委員として名を連ねている。翌年文部省に移って以後同会主催の講習会などでは、西尾実とともに長沼直兄は主催者側として中心的役割を果たしていく。

(11) 山下秀雄「現代日本語教育の源流をたずねて［続編］(i) —昭和初期の長直兄の日本語教科書と米大使館との関係—」『日本語教育研究』34号、1997年11月、pp. 10-23参照。

(12) 財団法人言語文化研究所『長沼直兄と日本語教育』開拓社、1981年11月、p. 219

(13) 日本語教授研究所『日本語教授指針—入門期』日語文化協会、1942年7月、pp. 83-89

(14) 前田均「資料紹介 文部省図書局長宛諸学校発回答「満支留学生ニ対スル日本語教授資料」(昭和14年5月)」『日本語教育史論考—木村宗男先生米寿記念論集—』木村宗男先生米寿記念論集刊行委員会、2000年9月、pp. 133-134

(15) 山下秀雄「現代日本語教育の源流をたずねて (iii) —教宣教師との関わり、初期の学習法、指導の理論と授業の実際—」『日本語教育研究』32号、1996年11月、p. 27

(16) 国際交流基金、日本国際教育協会『日本語能力試験 出題基準』凡人社、1994年11月

(17) 吉岡英幸「明治期の日本語教科書の「文型」」『日本語研究と日本語教育』明治書院、1999年11月参照。この時の調査では3級とＡＩの項目数はそれぞれ101と45となっていたが、今回は「～てくる」と「～ていく」を一つの項目にまとめたため、3級は100、Ａ－Ｉは44となっている。

(18) 前掲(2) p. 26

(19) 前掲(2) pp. 16-17

(20) 松宮弥平「欧米人に対する日本語教授法」『国語文化講座 6巻 国語進出篇』朝日新聞社、1942年1月。pp. 254-255

(21) 前掲(2)自序の p. 2

(22) 松宮弥平「復習と応用」『日本語』4巻1号、1944年1月。pp. 72-78

(23) 松宮弥平『日本語教授の出発点』日語文化協会、1942年10月、p. 2

(24) 前掲(12) pp. 219-220で長沼直兄は、弥平の授業参観を行った時弥平が教室を出た後生徒は先生の言うことが理解できなくて慌てて英和辞書をひいていたとして、弥平の教授法の趣旨はいいが実践面で問題があるようだとしている。ベテランの弥平でさえ不安があったとすれば、他の経験の少ない教師の教え方はかなり問題があったと考えられる。

(25) 前掲(2)の p. 30、p. 40、p. 43など。

(26) 山下秀雄は前掲(15)の pp. 23-24で、弥平が辞めるに至った原因は　a）日語学校の教師陣は気位ばかり高い素人集団であった。b）宣教師は音声言語から入る点で弥平の理解者であったが、その主張すべてを是認していたわけではない。c）弥平

も宣教師も頑固であったという３点をあげている。

(27) 前掲(4) p. 339

(28) 加藤諄氏は1907年生まれで、早稲田大学名誉教授、元早稲田大学文学部教授。著書に『日本金石文学』、『仏足石のために―日本見在仏足石要覧』など。氏に直接インタビューを行った（2000年10月）ところによると、大学院生であった1935年頃から３・４年の間、日語文化学校で日本語教育に携わったという。

(29) 前掲(23) p. 1

(30) 前掲(4) p. 308

(31) 例えば1942年に文部省が設置した南方派遣日本語教員養成所や、青年文化協会が主催した日本語普及研究会。